



第4回みどりの交流広場

～里とまち、くらしと文化・風土、人と自然をつなぐ事例紹介～

発表集

平成28年3月

公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会

第4回

みどりの交流広場 報告書

《開催》

日時 平成28年2月11日 12:00～

場所 第1部 花博記念ホール
(鶴見緑地公園内)

第2部 旧生き生き地球館
会議室(鶴見緑地公園内)

目次

◇開会挨拶	2
◇会場風景写真	4
◇事例発表	5
<里とまちをつなぐ活動>	
①農・都共生ネットこうべ	7
②NPO法人 島本森のクラブ	11
③NPO法人 ノート	15
講評	19
<くらしと文化・風土をつなぐ活動>	
④河内木綿はたおり工房	20
⑤梵菜農園	24
講評	28
<人と自然をつなぐ活動>	
⑥泉佐野丘陵緑地パーククラブ	29
⑦NPO法人 やましろ里山の会	33
⑧bioa	37
⑨庭暮らし研究所	41
講評	45
全体講評	46
◇パネル展示	47
農・都共生ネットこうべ/NPO法人 島本森のクラブ	49
NPO法人 ノート/河内木綿はたおり工房	50
梵菜農園/泉佐野丘陵緑地パーククラブ	51
NPO法人 やましろ里山の会/bioa	52
庭暮らし研究所/大泉緑地ヒーリングガーデナークラブ	53
日下山を市民の森にする会/服部緑地都市緑化植物園友の会	54
蜻蛉池公園夢の森づくり隊/宝塚フラワー会	55
NPO法人 アルファグリーンネット/枚岡ネイチャークラブ	56
こうべ森の学校/花のボランティア 花いっぱいやさかい	57
NPO法人 おおさか緑と樹木の診断協会	58
◇開催概要	

開会あいさつ

田中 充

(公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会 専務理事)

ここ鶴見緑地で国際花と緑の博覧会が開催されたのは、ちょうど 25 年前の 1990 年です。その理念である「自然と人間との共生」を展開するために、地域で自然と関わるさまざまな分野で活動されている市民・企業・団体等の皆さんの発表の場を設け、情報共有や協働のネットワークを促進し、共生の輪を広げようと、2012 年から「みどりの交流広場」を開催しています。今回で 4 回目になります。

今日お集まりの皆さんは日頃から、自然を保全したり、管理したり、あるいはまちに花を植えたりと、多岐にわたる活動に参加されています。今日はその活動を展開する発表や展示をご覧いただき、交流がますます深まるとともに、ネットワークが広がって、活動がより活発になることを期待しています。

今日はゆっくりとした時間の中で、皆さま方の発表を互いにお聞きいただき、日頃の活動のさらなる糧にさせていただければと思います。



コーディネーターあいさつ

川口 将武

(大阪産業大学デザイン工学部 建築・環境デザイン学科 専任講師)

私は、デザイン工学部で緑地計画やまちづくりの研究、地域での実践的な環境保全活動をしています。

皆さんは、普段フィールドで地域の自然や生き物とふれあったり、たくさんのメンバーとの人的な交流をいろいろとなさっています。あまり多くをお話すると、自分たちの活動の良いところをとられるのではないかと思う面もあるかもしれません。しかし、せつかくの交流の機会ですので、皆さんに「こういうことをするとうまくいくよ」とい



ったことや、「実はこんなことで困った」といった本音の部分もお話しいただきたいと思います。この後には、交流会もありますので、その中でより深い交流のきっかけにできたら良いと思います。

本日は9団体の発表の他に、10団体のパネル発表もあります。開演前に少しみせて頂きましたが、非常に素晴らしい展示が行われていました。

これから、素晴らしい発表を皆さんから聞けることを非常に楽しみにしています。それでは、皆さんの交流が進む機会になるよう、ご協力のほどよろしくお願いします。

会場風景写真



発表会



パネル展示



交流会

事例発表

第4回みどりの交流広場

■里とまちをつなぐ活動■

農・都共生ネットこうべ
NPO法人 島本森のクラブ
NPO法人 ノート

■くらしと文化・風土をつなぐ活動■

河内木綿はたおり工房
梵菜農園

■人と自然をつなぐ活動■

泉佐野丘陵緑地パーククラブ
NPO法人 やましろ里山の会
b i o a
庭暮らし研究所

事例発表①

「農都の連携交流で

生きものあふれる大都市神戸を！」

農・都共生ネットこうべ（兵庫県神戸市）

高畑 正



1. 発足のきっかけ

私たちは、阪神・淡路大震災が発生する前の 1991 年に活動開始。まず市の職員が市民をリードしようと、1992 年に神戸エコアップ研究会を結成。1998 年には「全国トンボ市民サミット神戸大会」を開催したことをきっかけに、その理念を引き継ぐ形で現在の「農・都共生ネットこうべ」が誕生しました。神戸を生きものいっぱいのまちにすることを目標に活動しています。

1991 年に、横浜の森清和さんという恩人と出会ったことが私たちの活動の原点になっています。いろいろな市民の方から、神戸のトンボの生態や須磨公園にトンボがたくさん生息していることなどを聞き、森さんや柳川市役所職員で柳川掘割物語の主人公の広松伝さんなどいろいろな方のアドバイスを受けながら活動してきました。

阪神・淡路大震災を経験から、コンクリートジャングルのまちを復活させるのではなく、緑豊かで生きものあふれるまちを目指し発信するために全国トンボ市民サミットを開催しました。広大な田園地帯も千mちかい六甲山もあります。そうした自然の豊かさに包まれた中に神戸の市街地があります。生きものあふれる神戸にするには、生きものの発生源として自然のエリアを大事にしなければならない。また市街地に呼び込むためにビオトープ環境を整えようとの結論を得ました。

2. 「田んぼの楽校」

田んぼは、生きものが発生する上で一番大事な場所と思います。そこで、農と都市の相互理解を深める場として、生産者と消費者、それに我々生きもの好きのメンバーで田んぼをやろうということになり、西区の木見という地域で 1999 年から「田んぼの楽校」を開きました。田んぼの中で子どもたちの環境学習やアイガモ農法などに挑戦しました。

最初は 100 人ぐらいのメンバーで始めました。春はレンゲの中で遊び、レンゲをすき込んで田起こしをします。パイプラインの水の源のため池について調べたり、探検したり、その後、代かき、田植えと続きます。アイガモ農法は農薬を使わない農法で、アイガモを 20 羽ほど飼って草引きに使います。レンコンも植えました。冬場のレンコン掘りは結構面白い作業。須磨水族園の仲間による生きもの教室や観察会なども開きました。私たちも田んぼの作業が初めてで、稲に花が咲くことを知るなど感激することも多くありました。田んぼの中で音楽を奏でたり、料理も作りました。稲刈りは、手で刈って稲木に掛けて干すという昔ながらの方法で行いましたが、脱穀はコンバインに頼りました。

アイガモは、みんなで激論を交わしたうえで、あえて子どもたちの前で命を頂くことにしました。アイガモが役に立つのは 2 カ月ぐらいで、それ以降は大きく肥培します。愛情が移りますが、涙を吞んで感謝して美味しく食べました。

収穫祭は楽しいことばかりです。稲わらでいろいろなものを作って温かさを感じたり、しめ縄やリース、納豆も。わら半紙も苦労して作り、エコマネーを発行しました。田んぼの活動の活性化を

目指しましたが、エコマネーは失敗しました。

神戸市の北区、西区はため池が非常に多い地域です。農都ネットで、約 500 カ所を調査し、ため池絵本もできました。そのほか数か所の地域に入って、歴史の掘り起こしや田んぼのビオトープ化などもしてきました。

途中で、農作業を指導する校長（お百姓さん）の体調の問題もあり、藍那分校に移りました。藍那は本年、国営明石海峡公園神戸地区が開園する場所です。この里山公園では生きもの系や里山系などいろいろな団体が活動しており、活発な交流を目指しました。しかし、思うような交流もできずに、現在の平野分校へとつながっていきます。

3. 上津橋圃場整備での議論

そんな中、神戸市で最後の圃場整備が上津橋地区で行われることになり、われわれがアドバイザーとして呼ばれ、いろいろな意見を言いました。ドジョウやメダカがたくさんいる田んぼを圃場整備でコンクリート水路にすることには、われわれは大反対。2 年ほど議論を続けました。結局、半分ぐらいしか意見は通らず、コンクリート水路は造られてしまいました。地形的には殆ど変化せず、田んぼの乾田化とパイプランで便利な水田になりました。あわせて、水田魚道や魚巢護岸、ビオトープ的な池、小川の深み、ヒガンバナの土手などは実現できました。

反対するだけではなく、上津橋地区でも土地改良区のお百姓さんたちと有機無農薬を推進するコープ自然派をつないで「田んぼの楽校」平野分校を実施しています。参加者が責任を持って田んぼをやってもらうために、「マイ田んぼ」制度に力を入れています。田んぼの水管理は運営委員会で行うが、田植え、草引き、稲刈り、脱穀などは自力で行ってもらっています。非常にうまく機能しています。また、この活動の中で、ナデシコ米という地元ブランド米の開発もされコープ自然派で販売しています。

田んぼの楽校のほかに、農都ネットこうべでは、学校ビオトープのモニタリング・観察会も行っています。東灘区の向洋小学校のビオトープで年に 4 回ほど継続的に子どもたちと観察会を実施しています。また昨年からは須磨離宮公園バタフライガーデンづくりも始めています。トンボやチョウの舞う、ふるさと神戸をめざしています。

（Q） 活動するときに費用がいろいろ掛かると思うのですが、どのように集められているのですか。

（高畑） 「田んぼの楽校」については、「マイ田んぼ」の参加者から 50 m²の田んぼに 6000 円払っていただいています。それで材料費や水代を入れて大体ペイしています。そのほか兵庫県からの農業関連の助成金もあるので、収支は少しプラス程度です。

離宮公園でのバタフライガーデンについては、花王と都市緑化機構のプログラム「花王・みんなの森づくり活動」の助成金で行っています。全てではないが、大半は助成金で賄っています。

● 発表資料

農・都共生ネットこうべ・田んぼの楽校
—生きもの保全からムラの活性化へ—

- 神戸エコアップの夜明け
- 全国トンボ市民サミット神戸大会
- 農・都共生ネットこうべ設立
- 田んぼの楽校木見本校
- 田んぼの楽校藍那分校
- 田んぼの楽校平野分校



トンボサミットから農都ネットへ

- 第9回全国トンボ市民サミット神戸大会
- テーマ「人と自然が共生するまちづくり」
- 震災後に発足したNPOの糾合
- 農を議題(宇根豊・新井裕・成清博・本野一郎)
- 農・都共生ネットこうべ
- 1999年5月 設立
- トンボサミット神戸大会の理念を引き継ぐ
- 田んぼの楽校・学校ビオトープモニタリング・
- まちづくり支援……

田んぼの楽校木見本校
1999.04～2005.12

- 目標
- 農と都市の相互理解を深める拠点
- 内容
- 農環境(小川・ため池・田んぼ)の再現
- 田んぼでの子どもの環境学習
- 農作業体験と自然の恵みへの感謝
- 田んぼづくり・連根植え・ドジョウの増殖
- 合鴨農法・エコマネー・音楽・調理……
- 校長 成清 博(まさに百姓)



里づくり支援活動

- いきいきため池天作戦(2002～)
- 北・西区ため池生物基礎調査(512池)
- 農民ヒヤリング調査(10池)
- 池の名前、言い伝え、食文化など
- ため池絵本作成
- はなのわらぐつ(2006.03)
- 北区大沢日西原地区
- 大沢町日西原地区ため池調査
- 地域の歴史掘り起し
- 水田ビオトープづくり

田んぼの楽校藍那分校
2004.12～2006.12

- 課題
- 参加者固定化、農業従事者(校長)への依存
- 地域への拡大不足、サービス業化への疑問
- 活動の方向
- 農村集落、他団体との連携交流
- 放棄水田の再生
- 農村里山環境の構築(サンショウウオ等)
- 里山環境保全のモデル公園化(国営公園)



上津橋圃場整備での議論

- 地元の意見
- 渾田の乾田化で合理化 ○
- 圃場整備とバイパス化 ○
- 共有水路土手はコンクリートで省力化 ×
- 環境配慮型圃場整備
- 水田魚道・魚巢ブロック・深み・たまり…
- 農都ネットの意見
- ドジョウの生息できる土の水路を残す ×
- 水路の土手はグラウンドカバーでなく野芝に ○
- ヒガンバナの保全増殖 ○
- 河端の保全活用 △



議論から協働 田んぼの楽校へ

- お百姓さんの傾向
- 若く有機農業なども熱心
- 手植えの田植え、稲刈りは未経験
- 都市住民へのおもてなし気持ち大
- 土地改良組合など人のつながりがある
- 農都ネットの思い
- 個人ではなく地域全体と協働したい
- ドジョウ、メダカ、アキアカネを残す方策さがし
- 直売所、河端再生などの村おこし
- 農と都の子どもの交流
- 校長 澤田正行理事長(若手農業者)

田んぼの楽校平野分校
2006.09～

- 上津橋圃場整備事業への関与
- 「里づくり」への積極的関与
- ドジョウ・メダカの生き残れる水路整備
- 条里制の名残の景観整備
- ニュータウンのなかの田園景観の保全
- 地域全体との連携





田んぼの収穫祭

長老のしめ縄づくり



生物多様性
保全水田視察

ジュンサイ
トノサマガエル

田んぼの楽校平野分校の概要

- 運営体制
上津橋土地改良区・土地・水・苗・技術指導
コープ自然派 参加者募集・会計・広報(有機)
農都共生ネットこうべ 全体調整・生きもの調査
- 参加状況(25年度)
全体面積:約1000㎡(1反)≒幅12×長84m
マイ田んぼ:16区画(4×12m)
共同田んぼ:5区画分(20×12m)
参加者:31家族約80人(自然派、横尾自然塾他)
参加費:マイ田んぼ6000円(昨年収穫18kg)
 共同会員大人1000円 子ども500円
- 24年度収穫 玄米390kg(粳付545kg)

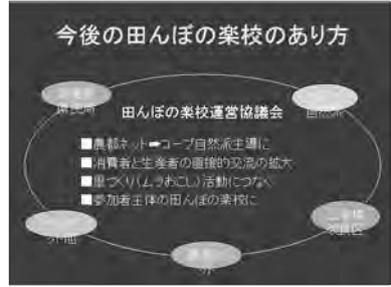


宇根豊
講演会

新農本主義旗揚げ

田んぼの楽校生きもの調査

魚類:オイカワ・モツゴ・タモロコ・メダカ・ドジョウ・コイ
鳥類:ツバメ・カワウ・サギ類
両生爬虫類:クサガメ・スッポン・ヌマガエル
甲殻類:スジエビ・ミナミヌマエビ・ホウネンエビ
貝類:カワニナ・ヒメタニシ・モノアラガイ
水生昆虫:コガムシ・マメガムシ
トンボ:アジアイトトンボ・ウスバキトンボ・ギンヤンマ
 シオカラトンボ・ナツアカナ
蜘蛛類:アシナガモ・オニグモ・スジブトハシリグモ
 チョウ・アゲハ・イチモンジセリ
その他を含め全41種類



田んぼの楽校の新たな展開

- 参加者から参画者へ
マイ田んぼ制の徹底
イベントの適時開催
- 地元なでしこ米の販売(コープ自然派)
- 田んぼを極める
稲苗を親からつくる
たい肥で土づくり(収量が減少)
宅地分譲での田んぼの楽校を売りに
魅力的な直売所の提案
かつての田園風景の再生(レンゲ畑)
子どもたちにご飯を食べる教育を



向洋小学校ピオトープモニタリング



向洋小学校ピオトープモニタリング



向洋小学校ピオトープモニタリング



横尾小学校ピオトープ



横尾小学校ピオトープ



須磨離宮バタフライガーデンづくり

「島本地区における里山保全とまちびとの係わり」

NPO法人 島本森のクラブ (大阪府三島郡島本町)

八里 良一



1. クラブのあらまし

島本町は、大阪府の最北東に位置する人口約3万人のまちです。大阪府下で唯一「全国名水百選」に選ばれた「離宮の水」があり、上水道の90%は地下水です。取水井は淀川沿いに9カ所あり、その背後地5カ所、計約35haを私どもが保全しています。

天然林、人工林、竹林と多彩な林内整備に加え、余材を有効活用していろいろなものを産出しています。また、体験イベントや技術指導なども重点的に行っています。これまでの参加実績は年間400~800名で、平均600名、月当たり50名となっています。

最近は大阪のどの地域の山林もコナラ等の広葉樹のナラ枯れに困っていることから、現地活動としては、ナラ枯れの原因となるカシナガ(カシノナガキクイムシ)の攻撃を受けた広葉樹を枯死する前に伐採して、薪にしたり、シイタケを植菌するためのほだ木として活用したりしています。

余材の活用策としてもう一つ強調したいのは、窯を作って炭焼きをして、粉炭にして田畑に戻していることです。同様に、広葉樹の落ち葉を使って腐葉土を作り、それらを田畑に戻す活動もしています。

また、居住区近く、すなわち林縁部の竹林を皆伐して植樹するイベントが島本町で行われ、私どもも協賛しました。それから、独自に広葉樹化するために、0.5haの竹林を皆伐して植樹し、現在も育樹作業を続けています。また、兵庫県では松枯れがまん延しており、その対策として県が害虫に強い品種として「ひょうご元気松」を開発したので、それを私どもが保全している林内に植樹しています。

2. まちびととの交流

まちびととの交流としてまず、府下の青少年グループとの交流に力を入れています。特に「緑の少年団」が府下に幾つかあって過去に7回受け入れていて、南部からも来ていただいています。他にも、地元のガールスカウトや島本町が子どもたちを対象に実施している「YYワールド」の協賛行事に参画し、青少年を指導する大学生も実習に来て、一緒に学んでいます。

また、CSR(企業の社会的責任)活動の受け入れも行っています。社会貢献をしようという企業を受け入れ、今までのところは主に竹林に入らせていただいています。大勢にお越しいただいており、昼食にバーベキューのメニューを取り入れるなどして楽しく活動しています。

それから、島本町のイベントにも参加しています。これにはいろいろあって、子どもたちを対象にした「YYワールド」の他にも、文化祭や農林業祭があります。主に林内整備で出た余材を活用して、クラフト類や木・竹製品、今日も展示しているリース類などを作り、参加者と交流を図っています。

最後に、町外のイベントにも積極的に参加しています。大きいのは「森林(もり)の市」で、大阪の桜之宮で行われたときに参加しました。それから、まちびとと交流を図るために、万博公園やあべのハルカスで「森が好き」フェスタといったものも仲間の団体と一緒に開催しました。また、

府境を越えて、京都府の長岡京市で行われた天王山・西山のフォーラムにも参加しました。

もう一つ、力を入れているのが技術講習会です。島本町フォレストサポーター養成講座は、次代を担うサポーターをより増やしていくために、平成 18 年から毎年、町からの委託を受け開催しています。また、安全講習会では、私どもの会員に他団体の方たちも加わって、チェーンソーや刈り払い機などの動力機械の技術アップを図っています。安全な林内作業ができるように、自分たちの手で推進しているといったところです。

3. 今後も継続したい活動目標

活動目標は、地球環境という大きな観点から、健全な里山環境を回復・保全することが第一です。もう一つは、講習会や住民との協働活動を通じて、里山保全の重要性の普及・啓発をすることです。少ない人数ではやっていけないので、これからも普及・啓発を図っていかなければいけないと考えています。島本森のクラブでは月 2 回の日曜日に定例的に集まって活動しており、今後も継続して頑張っていきたいと思っています。

(Q) こうべ森の学校の木下と申します。私どもは六甲山で森の保全活動をしているのですが、島本森のクラブでは町と協力してサポーターを養成する講座を開かれているというお話がありました。私どもは会員が高齢化しており、入ってくる会員も少ないのです。その中で、どのような活動をすればよいかというのが現時点での悩みなのですが、そのあたりはいかがですか。

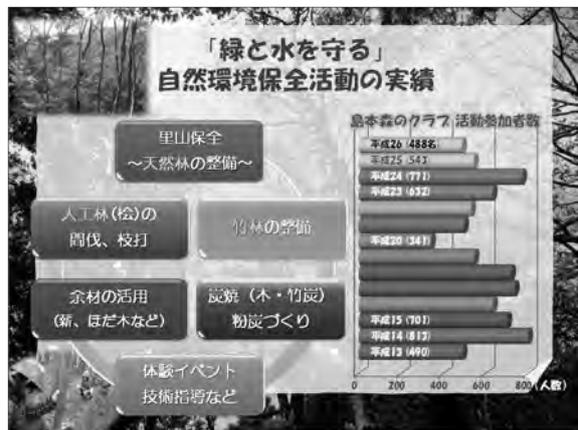
(八里) フォレストサポーター養成講座は、費用も受講者負担は最小限となっています。やはり講師への謝礼や林内指導のサポーター等も必要で若干の費用は掛かるので、町の事業として実施しております。

それから、私どもが運営の中心になって、いろいろな有名な先生方を招き、年 12 回の講座を開いています。半年間ですので講座は月 2 回で、座学と実習の両方を盛り込んでいます。実習では、チェーンソーを使って大径木の伐採なども行います。1 日の前半でロープワークなどを行い、後半は現地で木を伐るという形を取っています。ただ、約 3 万人の町民が母集団ですので、現実として希望者が少ないのが実態で、希望があれば町外の方にも受講していただいています。

(Q) 募集等は町のホームページや広報誌でかけているのですか。

(八里) できるだけ多く参加していただくように、町の広報誌やホームページに載せていただいていますし、私どものホームページにも掲載しています。

● 発表資料



まちびととの交流

①府下の青少年グループとの交流

「青少年森林づくり活動」
(H14年4回)

・内外学生センターより
(H15年27名)

・島本町YYワールド協賛
(H15年より毎年)

・進学園生(H16年)

・関大生(H19年2回)

・府「緑の少年団」
(H21年5回・H24年2回)

・カールスカウト
(前期90回、H24年)
など



H27年のYYワールド樹し殿祭



緑の少年団



少年団指導のための関大生の実習



カールスカウト団員の樹冠見学

まちびととの交流

②CSRの受け入れ

北大阪生協(H22年)

日立テクノロジー関西(H23)

帝人労働(H24より毎年)

三菱UFJ信託銀行(H24)

サントリーHD(H24)

ほか






まちびととの交流

③島本町イベントへの参加

- 文化祭
- 農林業祭
- YYワールド





まちびととの交流

④町外イベントへの参加

天王山・西山フォーラム展示
(長岡京)

森の市 読書体験/茗

なか好き フェスタ(万博公園)

なか好き フェスタ
アペ/ハルカス






技術講習会

島本町フォレストサポーター
養成講座(H18年より毎年)

安全講習会
(チェーンソー・刈払機)






今後も継続したい活動目標

- 放置されている山林・竹林の整備を行い、健全な里山環境を回復・保全する。
- 講習会、住民との協働を通じて、里山保全の重要性の普及・啓発を図る。

NPO法人島本森のクラブ



定例活動：第2、第4日曜日

事例発表③

「摂津峡・芥川わくわく探検隊

～高槻の「里山」と「子ども」をつなげて10年～

NPO法人 ノート（大阪府高槻市）

杉本 真一



1. 活動のきっかけ

高槻市という京都と大阪の真ん中の街で活動을續けて、気が付けば10年たちました。主に高槻に住む子どもたちを対象に年間のプログラムを企画し、子どもたちに自然と農業の体験を展開しているNPOです。

わくわく探検隊を始めたきっかけは、高槻市役所が開いた景観ワークショップでした。高槻市は南北に長い形をしています。私たちは街の人間なのですが、ワークショップに参加したとき、大阪で唯一どぶろくを作っている故・畑中喜代司さんという農家の方と出会いました。畑中さんは里山に住んでいる方で、子どもたちと里と、まちをつなぐ活動をしていきたいという畑中さんの思いと私たちの思いが一致して、探検隊がスタートしました。

2. 活動の概要

募集方法としては、チラシを毎年5月の連休明けごろに高槻市内の41小学校全てに配布させていただくなど、教育委員会より広報面での強力なサポートを頂いて、参加者を集めています。

参加費は2万5000円で、10回シリーズで主に米作り、夏野菜作りなどを行います。夏はキャンプなどもしています。いろいろな機会に皆さんに注目していただいている、5～6年前には農林水産省の「教育ファーム推進事業」に採択していただき、「食料・農業・農村白書」にも事例として掲載していただきました。年間を通じたプログラムである点と、地域の学校の協力を得て子どもたちに広報させていただいているところを高く評価していただいています。

体験プログラムは大体日帰りなのですが、夏休みには合宿を行っています。かつての分校跡で、今は地域の公民館になっている施設があるのですが、そこで布団を借りて行きます。造りがまさに教室で、肝試しをしたり、みんなで衣食住を共にしたりします。畑を借りているので、農業体験もしています。

活動を通して、大阪ガスとの出会いがきっかけとなって、食べるだけでなく食育という観点から、大阪ドームに1年前にオープンしたハグミュージアムで、親子の料理教室を始めました。大阪ガスには毎回、会場と収穫した野菜以外の食材費用を協賛していただいています。それから、日本コナモン協会の熊谷真菜会長は、俗に言う「こなもん」の普及活動をされていて、B-1グランプリの審査員を務めている方なのですが、子どもたちのために毎回いろいろなレシピを作ってくださいます。実は島本町の方で、大変長くお付き合いさせていただいています。最初はそば粉や米粉を使っていたのですが、最近関西のだし文化を全国に広める活動に力を入れておられて、だし作りなどを子どもたちと交流しています。

さらに、まちと里をつなぐというテーマの下、「子ども昼市」を開いています。子どもたちは、予行演習の形で夏休みに親向けに野菜を売り、11月にはアクトアモーレという高槻駅前の商業施設で実際にブースを作らせていただいて、収穫した米や野菜を販売します。自分たちで里の農家の皆さ

んから農産物を調達したり、ポスターや値札を作ったり、近くのスーパーヘリサーチに行ったりして、自然の野菜を多くの方に勧める活動をしています。

初回の2007年は参加者がたった4人でしたが、今では毎回50名ぐらいが参加しています。参加者の募集は本当にわれわれの活動の要ですから、チラシを配布などしてスタッフの確保に務めています。毎回来られる方もいれば、無理な方もいるのですが、高校生から大先輩までいろいろな方に関わっていただいています。

最近、武庫川女子大学の藤本勇二先生のゼミ生にも来ていただいています。学校の先生を目指す教育学科の学生です。10年もやっていると参加者も増え、スタッフになりたいと言って関わってくれている学生たちは、本当の財産だと思って感謝しています。NPOなので、運営資金については、地元の祭りに出店したり、助成金の申請をしたり、大阪ガスなどの企業と連携したりしながら確保して、活動を進めています。

(Q1) それだけたくさん子どもを集めて実施したら、けが人などは出ませんか。

(杉本) 切り傷や転倒などのけがはありますが、スタッフが安全面にも注意しているので、大事に至るけがは今までありません。一番大事なところですね。

(Q2) 名前のノートには、どういう意味があるのですか。

(杉本) ノートというのは「農人」、農の人になってほしいという思いと、今も続けているのですが、高槻の小中学校で不登校の子どもたちをサポートする訪問活動を行っているので、心のノートという意味も込めています。ですから、ロゴマークも音符から芽が出ているようなものになっています。

(Q3) 10年も子どもたちと接してこられたということですが、卒業した人は現在、どんな手助けをしてくれていますか。

(杉本) 最初のときに小学6年生だった子は、今は22歳で大学生ぐらいの年代なのですが、毎回は来られなくても活動に参加して、子どもたちと関わってくれています。スタッフに遊んでほしい、構ってほしいという子どもたちが結構多くて、おんぶや抱っこをせがまれたり、肩車をしてくれと言われたりします。大きくなったスタッフたちは、「おれらも昔はあんなんやったな」とぼろっと言います。昔の自分を思い出して、スタッフの気持ちが分かったと言ってくれるのが、とても励みになります。

● 発表資料

わくわく探検隊
(大阪府高槻市)

～多世代間交流の中で
生まれる「つながり」～



事例発表～里とまちをつなぐ活動～
第4回あどりの交流広場 (2016.2.11)

高槻市NPOセンター

まずは自己紹介。

■ 日本橋一 (市川事務局長) です。



こんなことやっています！

NPO法人ノート「摂津峰・芥川市くわく探検隊」隊長
高槻市不登校支援員
淀川管内河川センター(国土交通省淀川河川事務所より任命)
前高槻市市民公益活動サポートセンター管理運営委員会常任委員
高槻シティハーブマラソン総務委員 など



「わくわく探検隊」とは？

■ 「わくわく探検隊」実現までの概要

高槻市景観ワークショップで「たかつきの里山・原地区」を調査。(平成18年)
そこで都市農業の振興と遊休地の解消を目指している畑中喜代司氏(畑中農園)と
出会う。畑中さん「子や孫に里山の景観を残してきたいという思い、
平成19年度～「わくわく探検隊」の開催へのきっかけとなった。

■ 実施方法

年間プログラムとして専属
高槻市内の全小学校(41校、3～6年生児童)へ専属チラシ配布
高槻市教育委員会の協力(小学校長会で)の事業説明
→広報面でのサポート！！




「里とまちをつなぐ」から「里とまちをつなぐ」へ

■ 平成20(11)年度 農林漁業(教育)チーム推進事業」に採択。

■ 平成21年度 「食料・農業・農村白書」に事例掲載。

■ 取り組み：採択後の取組経緯

【学・民・農と協力】

● 地元農家と子どもたちが交流を深める「収穫祭(地元野菜販売)」の実施
米作りを通して子どもたちの農業に対する理解を促すとともに、生産の現場から
流通、販売までの一連のプロセスを体験する機会を創出することで、食の安心・安全
への意識を高める。また、地元農家とのふれあいを深めるきっかけとして、収穫した
農産物を販売する「収穫祭(市ナカ六子ども屋市)」を開催、「農林漁業体験(教育
ファーム)」の地域への広がり推進する。
「とぶく村区」である原地区の酒造りの現場において、米作りから醸造過程まで
の学習を通じ、地域の伝統・歴史に対する理解を深める。




■ 「高槻スライム」 環境型自然体験型農業体験プログラムの実務。

★たかつき里山会館 9月実施 2泊3日
【内容】 都市体験、きむためし、庄屋体験、川遊びなど ※昨年はお客に宿泊

★ありわく英語のキャンプ 9月実施 1泊2日 開催(公益財団法人高槻市都市交流協会)
【内容】 英語で遊ぼう、キャンプファイヤー

都市部にありながら森林、河川、田畑といった自然を構成する要素が全て揃う「原地区」の立地特
性を活かし、川遊びや山歩きなど四季を通じた様々な自然体験プログラムと連携した農業体験プ
ログラム。

★子どもたちの成長。そして、原地区を好きになっていく
★共同生活を通じた仲間づくり



農林漁業体験(教育ファーム)は面白いとアカン！！



「里とまちをつなぐ」から「里とまちをつなぐ」へ

【地元野菜を使って】

●料理教室「なもア카데미」の実施 協办(日本コメ研)協会
農業体験に加え、収穫、調理、加工といった食育に関連するプログラムを実施す
ることで、地産地消の重要性について学習するとともに、里山の自然や歴史への
理解や、地域に対する愛着心の向上を図る。




日本コメ研協会の総合委員会が講師です！

そば製団子汁などを作りました
協賛: 大阪ガス株式会社

原地区(里山)の自然や歴史への理解や、地域に対する愛着心



■子ども屋市 協力：マカトアモール店舗（山形高視駅前商業施設）

●11月上旬
街ナカ女子ども屋市！！～思いっぱい収穫祭～
【内容】収穫したお米、野菜の販売体験
当日の流れ

1. 販売部門決め
2. 作戦会議（いくらで売る？）
3. ポスター・種札作り（取組を作る班も）
4. 商品の仕分け・陳列作業
5. 販売開始
6. びっさを持って呼び込み
7. 販売終了（売上計算）



地元の「マ子」と「里（農家さん）」をつなぐ

★苦勞員と課題

■この春、10年目を迎える「わくわく採採隊」

1. 参加者の募集
→当初、単発プログラムとして募集。小学校へ配布することで参加者増！
2. スタッフの確保
→プログラムをサポートするスタッフ（Jr. 高校生 大学生 社会人）
武庫川女子大の藤本勇二先生との出会い
3. NPOの運営、持続可能な体制づくり
→活動資金、収穫野菜の販売、地元のお祭りの模擬店出店
協賛企業とのコラボプログラムなど

■ありがとうございました



講 評

川口 将武

3件とも素晴らしい発表で、とても興味深く伺いました。第1セッションのテーマは「里とまちをつなぐ活動」ということで、農家と都市、田園地域と都市、あるいは都市の郊外部にある森林や竹林と都市をつなぐようなフィールドで活動している3団体だったと思います。里とまちをつなぐ中で、「活動の継続性」は重要なテーマです。その意味で、どのように活動を継続しながら発展的にしていくかという点では、子どもが全体のキーワードになっていたと思います。

まず、最初の農・都共生ネットこうべの活動では、田んぼの中でいろいろな楽しみやレクリエーションを入れながら、田んぼがどのように地域の中で成り立っているのかを学ぶとともに、水の存在も大事にされていました。ため池があって、田んぼとどういふふうにつながっていて、それがどういふふう自然生態系の保全とつながっていくのか？自然のつながりと農を大事にしながら、子どもたちにきちんと伝えていくことを大事にされているという点が、非常に興味深かったです。中でも、アイガモの話にとっても驚きました。ご飯以外にも、私たちはいろいろな食べ物を頂いています。アイガモが大きくなったら食べることで命の大切さを学ぶ。そのことが子どもの心の中に残って、また活動へ戻ってこようと思うこともあるのかなと思いました。

次に、島本森のクラブの活動も非常に多彩で、もう17年も続いているということでした。大きく四つの活動をされていますが、その中でも青少年との交流を大事にされていることが共通していると思いながら伺いました。特に、活動の中でけがをしたら、せっかくいいことをしているのに、それで活動の発展がトーンダウンしてしまいます。そのために安全講習や技術講習をして、みんなで技術向上を図りながら安全を保っている点が非常に素晴らしいと思いました。

最後のNPO法人ノートについては、先日、ある友人からNPO法人ノートは川でいろいろな活動をして非常に頑張っているという話を聞きまして、今日の発表をとっても楽しみにしていました。子どものケアや安全性に注意して、「教育」を絡めて活動を行っている中で、とても面白いと思ったのは、合宿をしている点や、「子ども昼市」で子どもたちがリサーチして、それを都市に持って行って、農が消費者の中でどのように動いているのかを体感させる取り組みをしている点でした。農地で取れたものが都市でどう消費されているのか、生産と消費をきっちりシステムとして子どもたちが学ぶというのは、非常に面白い視点だと思いました。

里とまちをつなぐという観点で、次の世代の子どもたちを大事にしながら活動をつないでいくことの大切さ、あるいは自然生態系がどういふ活動サイクルとつながっているのか、食とのつながりから活動を伝える重要性を三つの発表から学ばせていただき、非常に興味深かったです。

事例発表④

「河内木綿再生プロジェクト」

河内木綿はたおり工房（大阪府東大阪市）

中井 由栄



1. 工房設立のあらまし

2004年、大阪商業大学に事務局がある「河内の郷土文化サークルセンター」が20周年を迎えたとき、大和川付け替えから300周年でありましたので私たちは記念事業を開催しました。秋に実がなる河内木綿を植え、昔の川跡に河内の文化と歴史を表現し、河内木綿を配置して鳥瞰図のように展示いたしました。記念展示会終了後、河内木綿の綿実を集めて、綿繰り、糸紡ぎ、糸を草木染して機織りをし「川ゆうゆう」の冊子（記念展示をまとめた本）を入れる箱を作りました。記念事業後、河内木綿の種の継承と河内木綿の再生を願い「河内木綿コットン・クラブ」の会を設立いたしました。

その後、大阪府の補助金を得て、東大阪市の北東の日下町に「河内木綿はたおり工房草香」を設立し、昨年7月1日からは、石切参道商店街の上地区にお世話いただき、広い敷地の古民家に機織り機4台、糸紡ぎ機5台、綿繰り機5台を置いて、「河内木綿はたおり工房」と名称を変更し活動しています。「河内木綿コットン・クラブ」設立当初の会員は8名から発足して、現在は「河内木綿はたおり工房」40名になっております。工房は会員がいつでも立ち寄れる場所であり、参道にあるので本当にたくさんの方が来られます。トイレ休憩をしたり、ちょっと立ち寄ってお茶を飲んだりといった憩いの場になっています。

2. 河内木綿の特徴

河内木綿は7月末ごろに花を咲かせます。花の外側は黄色、中はえんじ色です。綿の花を見たことがある方もおられると思うのですが、黄色や薄いピンク一色のものは、明治になって入ってきた米綿といわれるものです。昔からある国産綿、アジア綿は、繊維が短いため、紡績用の糸になりにくいとされていることから、私たちはひたすら手で紡いでいます。

綿の収穫は8月終わりから10月ごろまで行われます。昨年度は、8月終わりから9月初めにかけての台風や冷夏などで収穫が遅れ、収穫量がやや少なかったのですが、それでも500株から約20kgが収穫できました。現在、畑は何もない状態で空けてあります。

私たちはまだ10年ほどしか活動が続いていませんが、綿の種は300年、400年と続いてきたものです。何年かすると発芽率が悪くなるので、毎年誰かが植え続けて平成まで続いています。私たちも次の時代に継承できるよう毎年植えることを一番の目標としています。

3 大和川付け替えと木綿栽培

300年前、大和川付け替え（川違え）によって河内の土地から大きな吉田川がなくなりました。長瀬川は現在、水路として残っています。河内平野を縦横に流れていた旧大和川のその跡に新田ができました。新田を取りまとめる新田会所が設けられ、今残っている新田会所は東大阪市の鴻池新田会所、八尾の安中新田会所跡、大阪市内の加賀屋新田会所跡が公開されています。

大和川付け替えで、河内は綿の一大産地になりました。川跡になぜ綿を植えたのかは分かりませ

んが、綿の需要は多かったようです。皆さんが今着ていらっしゃる衣服には絹、木綿、ナイロンなどいろいろな繊維が使われていますが、当時は平素着ていた衣服は絹ではなく木綿でした。私たちは時代に遅れたことをしているのですが、繊維メーカーの人から手紡ぎ糸は貴重品ですよとっていただいたので、それを励みに頑張って糸を紡いでいます。

綿の木は同じ畑の土で連作するのはあまりよくないらしく、昔は半田農法といって、その年に田んぼにした場所は翌年には畑にしていたようですが、現在私たちは場所もなかなか確保しにくいので、良い土壌になるように石灰を入れるなどして土を改良し、同じ場所で栽培して8年目になります。畑の土壌は土が6、砂が4の割合がいいそうです。根は浅いので、栽培が終わると株がすぐに抜けます。綿の枝は放っておくと2mぐらいになるのですが、70cmくらいで芯止めをして、枝にたくさん実がなるように努力しています。

2年ほど前、「東大阪市の昭和」という写真アルバム帖が出版されたのですが、その中に「はねつるべ」の写真が見られます。今では見るできない風景です。石の重さで水を揚げて畑に流します。昔のはねつるべがあった畑の風景は現在では生駒山の上から見るとビルの屋根ばかりですが、一昔前の菱屋辺りが東大阪市最後の綿の収穫場所だったそうで、当時（80年前）、は大軌鉄道の線路と、ハウス食品株式会社、大阪商業大学のビルが目立った建物であったようです。のどかな田園風景が広がっていたようです。

4. 工房での活動

東大阪市日下町と東石切町の畑で綿を植えています。以前、双葉が出たときに野鳥に食べられて全滅したことがあったので、種はフラワーポットで育て、ネットをかぶせて本葉が出るまで大事に管理しています。秋に実がなり収穫した綿は2~3日干して、種と綿を外す綿繰りの作業をし、布団屋さんで綿打ちしていただいて、それを糸に紡ぎます。紡いだ糸は徳島の「藍の館」に藍染めをしていただいています。工房でも手紡ぎ糸を草木染して、織りあげた河内木綿から小物をつくっています。河内木綿の反物の販売はしていませんが、河内木綿再生に向けて紡ぐ糸、機織りを研修しながら河内木綿はたおり工房の活動に専念しているところです。

工房の玄関先にはのれんを掛けて入り口ではおたふくさんの人形が皆様をお迎えしていますのでいつでもお越しください。お待ちしております。

(Q) 江戸時代はかなり綿栽培が盛んだったのですか。

(中井) そうですね。江戸時代の後半になると、河内木綿が天満川から北前船に乗って、北の方に運ばれたそうです。

「全国コットンサミット」第1回開催の年は東日本大震災のあった2011年だったことから、今も兵庫や大阪などから被災地に木綿を植えるに行っておられます。木綿は水上げがとてもよく、昔は沿岸部の干拓事業で木綿を植えたところ、3年後には塩分が抜け畑になったという事もあるって、津波の塩害を解消するため綿を植えているそうです。元の畑に戻りつつあるようです。(東北地方は寒冷地帯のため収穫量はあまり良くないようですが)

昔は江戸から北では木綿がなかなか育ちにくく、北の地方の人は木綿を待っていたようです。河内の人々は畑で収穫したらすぐに綿繰りをして出荷していたそうです。

● 発表資料

第4回 緑の交流広場
平成28年2月11日(木・祝)

河内木綿はたおり工房
石切参道商店街 上地区

河内木綿の花と実



綿の実(8月下旬ごろから10月下旬にかけて収穫)

7月下旬から花が咲く
花のあと期と呼ばれる
青い実ができる

大和川付け替え(川違え)によって
作られた主な新田

鴻池新田(旧新開地)	158.9町
深野新田(旧深野池)	97.3町
山本新田(旧玉串川)	64.2町
深野南新田(旧深野池)	63.3町
深野北新田(旧深野池)	57.7町
市村新田(旧大和川上流)	55.3町
など、大小48、総面積 (ha)余の新田が作られた	

【参考資料「大和百年史」付図から作成】




はねつるべのある畑 農民の知恵によって考案されたはねつるべは、柱の上にねぎといわれる構み木をわたし、片方の端に釣瓶を付け、もう一方につけた石の重みを利用して井戸をくみ上げるもので、江戸時代から見える。(稲田 昭和39年)

【参考資料「東大医市の昭和」寄真帖】



河内木綿 綿畑(240株)収穫量 約13kg 東大医市白下町
(200株)収穫量 約 7kg 東石切町



竹製紡車
河内木綿を紡ぐための道具



ンドマンは誰でもここで演奏してくださいという方針を貫いています。昔は五穀豊穰を願って、田畑で田植え歌や稲刈り歌などを歌っていました。現代においては、それが稲刈りロックや田植えジャズであってもいいのではないかと思って、音楽をやっています。それに、こういう楽しさを付け加えないと継続できないと思っています。体験に来ていただいた方には、その場でレンコン料理を振る舞っています。リピーターの方が結構多いです。

また、面白いネタを作っていこうということで、ブラックレンコンマンというキャラクターを勝手に作り、Facebook やインターネット上で広げています。子どもたちが、「あのおっちゃん、おもしろい農業やってるな」と思って、楽しんでくれなければいけないのです。いくら真面目に「いいものを作りましょう」と言っても、子どもたちは見向きもしません。

言いたいのは、やはり「開かれた農園」でなければ駄目だということです。それから、「慣行農法からの脱皮」です。今までこうしなければならぬと言っていた農法にまず疑いを持ち、全部否定してみることで。私は農薬肯定派ですが、農薬をそれほどまかなくてもいいだろうと考えて、今では無農薬で米とレンコンを作っています。それから、「子どもたちへの開放」「農業はファッション」です。モスグリーンや黒い作業服を着ていても誰も見ませんが、派手な格好をしていくと子どもたちが見てくれます。それから一番大事なものは「経済的な成立」です。これがないと継続できないと思っています。

(Q1) われわれもレンコンをやったのですが、ご婦人方が結構やみつきになって、真冬なのに2時間ぐらい田んぼの中でレンコンの根っこを探っていました。

(西田) うちでも体験型はほとんど奥さま方です。レンコンは店で買うと高いですから。

(Q1) われわれは手で掘っていたのですが、ユンボやジェットは使っていないのですか。

(西田) 機械は一切使っていないくて手掘りです。

(Q2) レンコンの味はどんな感じですか。

(西田) 茨城や徳島辺りのレンコンは水の中で育っているのです、しゃきしゃきしています。それはそれでおいしいのですが、河内蓮根は非常に硬い粘土質で育っているのです、ほくほくとした芋のような感じで、糸を引くようなレンコンです。ぜひ食べてみてください。

(司会) 飛び込みでレンコンの収穫をさせていただけるのでしょうか。

(西田) いつでも来てください。長靴とかっぱの下の部分だけあれば大丈夫です。長靴は何足か置いているので、来ていただければいいと思います。

(Q3) レンコン畑の深さはどのくらいあるのでしょうか。

(西田) 立っているところから40~50cmの深さに一番おいしいレンコンがあります。以前、門真で作っていた時代は1mの深さまで行ってしまったことがあるのですが、深いところにある方がおいしいです。人間と一緒に、苦労したものの方がおいしいですね。

● 発表資料





講 評

川口 将武

2件とも素晴らしい発表で、とても興味深く伺いました。まず、河内木綿のはたおり工房の発表に、古い河内平野の写真が出てきました。私も大学が大東市にありまして、古写真はたくさん集めています。通っている学生に「この辺は昔、田園地帯で何もなかったんだよ」という話をしても、都市化してしまっていて全然伝わらないのです。しかし、古写真を見せながら、実はこの地域は大和川が流れていて、川が付け替えられてまちができたというような地域の歴史を話したり、湿地帯であったという地域性やその土壌条件であったから河内木綿や河内蓮根が作られているのだという話をすると、リアリティを持って学生に伝わっていきます。そのように古写真を活用して、くらしと文化、身近な衣食住を通じて地域自然のことを伝えると、教科書で読むよりも身近に感じられて、地域に興味が出てきます。

次に、梵菜農園の写真を見てあまりに楽しそうなので、私も蓮根掘りに行きたくなりました。農業はファッションだとおっしゃっていたのですが、もし、活動に参加させて頂くときは、別に何を着ていてもいいのですよね。とにかく楽しく体験できるようなことや場があれば、やりたいと思う仲間も増えていきますし、地域の歴史を知ることによっていろいろな興味が湧いてきて、さらに活動の仲間が増えていきます。歴史と自然環境や農は一見すると関係がないように思ってしまうがちですが、実はつながっているということをおぼろげに感じました。

「地域、企業、行政の協働による公園づくり」

泉佐野丘陵緑地パーククラブ（大阪府泉佐野市）

松井 弘



1. 泉佐野丘陵緑地の概要

泉佐野丘陵緑地は、大阪南部のちょうど関西国際空港の対岸に位置しています。昨年 10 月にはコミュニティバスの停留所が公園内に設置されるなど、公共交通の充実にも取り組んでいます。公園の面積は約 75ha、甲子園球場約 18 個分です。阪和自動車道の上之郷インターチェンジより東側を東地区、西側を中地区、西地区と呼んでいて、公園中央部の中地区から順に整備を進め、平成 26 年 8 月に中地区の一部約 13ha をオープンしました。和泉葛城山系の前山に位置し、なだらかな丘陵と自然豊かな樹林地やため池で構成される昔懐かしい里の風景が広がっているのが特徴です。

この地域には、長い時間の中で培ってきた独自の歴史や文化があります。古くは室町時代、九条家の荘園として成立した日根荘が栄えました。そのころから、人々の営みを通じ、時節の催事や自然への繊細な感性が育まれ、豊かな文化が醸成されてきました。

2. 四つの理念

私たちパーククラブのメンバーになるためには、安全に関する知識や公園づくりのマナーなどを学習するパークレンジャー養成講座の受講が必要です。公園のテーマや理念を共有し、公園づくりやイベント、プログラムの企画などを通じ、人と公園をつなぐ活動を進めています。自分たちだけが楽しむのではなく、公園を訪れる皆さまに広く楽しんでいただける公園を目指して、メンバーが公園でやってみたいこと、公園で必要と思われることを考えながら、企画や活動に励んでいます。

われわれが公園をつくる上で、大切にしている四つの理念があります。公園事業が始まる際、学識者や公園の専門家、府民の代表、大阪府が意見を出し合って決めたものです。

一つ目は、シナリオ型の公園づくりです。多くの府民の方々と話し合いながら、一緒に公園の将来の姿や利用のルールを決めていきます。また、一度決まったルールも、時代の流れや府民のニーズの変化に合わせて柔軟に改良を加えています。

二つ目は、景観を重視した公園づくりです。美しい樹林やため池、棚田跡など、自然環境の魅力を生かした景観づくりを行うことで、この公園を訪れる人たちがさまざまな風景との出会いを楽しめる公園づくりを進めています。

三つ目は、環境に配慮した公園づくりです。公園内のため池や樹林地、貴重な生物などの自然環境を守るとともに、公園づくりの過程で発生する間伐材、剪定枝等のリユースや、子ども向けの環境学習などを実施しています。

最後に、地域の活性化等に役立つ公園づくりです。学校、地場産業、企業、各種団体等と連携し、公園内でさまざまな活動プログラムを展開することで、地域緑化、福祉、コミュニティ形成等に活躍する人々の育成、観光ネットワークの拠点形成などに努めています。

これらの理念を共有し、地域の方々や団体と連携して、みんなで「えん」を結びながら、人と自然をつなぐ新しい公園づくりを展開しています。

体制としては、パークセンターに駐在している大阪府の担当者と日々情報共有しながら、協働活

動を行っています。そして、2カ月に1度開催される運営審議会において、公園で行われる全ての活動について助言、指導を仰ぎながら事業を進めています。全て公開で開催される運営審議会の設置は、事業の透明性を確保するだけでなく、よりきめ細かな公園づくりのPDCAの実践に役立っています。

3. 活動の紹介

パーククラブでは、各メンバーの興味を生かし、動植物などのさまざまな調査活動も行っています。それにより、地域目線のきめ細かなデータが蓄積され、それが来園者向けの園内案内に反映されて、来園者へのサービス向上につながります。自主活動として行われているので、まさに趣味の延長です。つまり、自分たちの楽しみが来園者にも還元される仕組みがあるということです。大阪府からは調査に必要な備品の購入、データ蓄積、パーククラブのスキルアップのための講師派遣などの支援を得ています。

大阪府は主要な幹線園路のみを整備し、公園に広がる散策路は、間伐材などを利用してパーククラブが手づくりで整備しています。こうした作業は大変時間がかかりますが、自分たちで造った施設ですので、施設に対する愛着が向上します。修繕などのきめ細かな維持管理もパーククラブが自ら行っています。

また、パーククラブは環境をテーマにした体験や学習を子どもたちに提供するため、イオン日根野店チアーズクラブと協働して現地での活動を行うなど、地域活性化を図るとともに、五感を使った体験プログラムによる来園者満足度の向上を図っています。

4. 課題と今後の展開

パーククラブは立ち上げから5年が経過し、メンバーが100人規模の大所帯になりました。園内でのプログラム開催などを通じてさまざまな経験を重ねてきましたが、幾つか課題も抱えています。まず、日本の現状と同様、メンバーの高齢化が挙げられます。若手が少なく、男性メンバーが多いことも特徴です。また、連絡・調整等の事務局作業が増えていることも課題の一つです。そこで、養成講座の募集方法や内容を見直すとともに、活動にも幅を持たせて、女性も参加しやすい活動内容にしていきたいと考えています。

昨年11月9日、市民ボランティア、それを支援する企業グループ、行政が連携した公園づくりを進めている先駆的な事例として評価され、パーククラブと大輪会が「緑の都市賞」内閣総理大臣賞を受賞しました。今後も連携を強化し、この賞に恥じないよう、公園づくりに汗をかいていきたいと考えています。

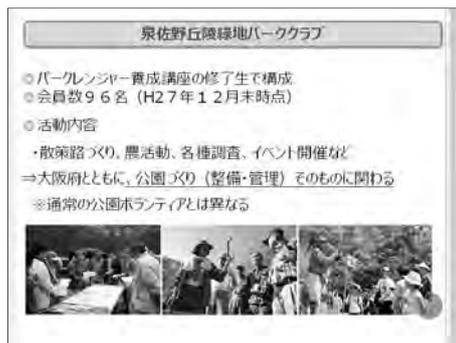
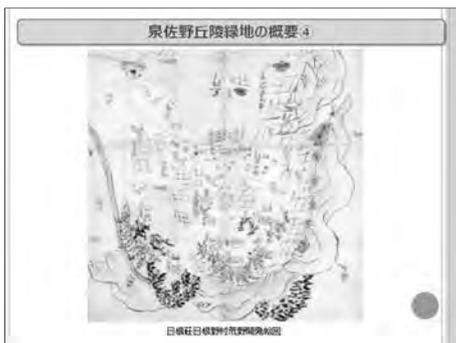
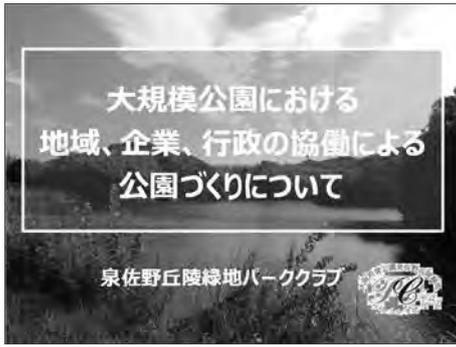
(Q1) 活動の資金源を教えてください。

(松井) パーククラブの活動に係る費用については、大輪会という企業グループから支援を頂いており、併せて一部公費での支援も頂いております。

(Q2) 目指そうとされている公園の理想像はどのようなものですか。

(松井) いつまでたっても完成を見ることがない、作り続ける公園です。

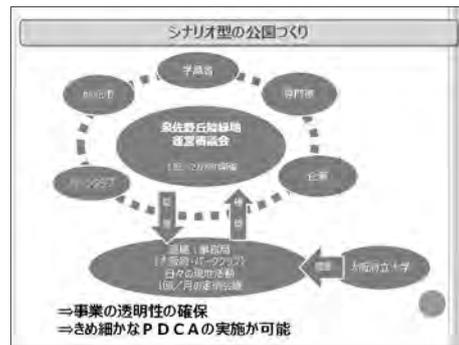
● 発表資料



公園のよつの大切な理念

**地域の方々、企業、団体と連携し、
みんなで「えん」を結びながら、人と自然をつなぐ新しい公園づくり**

- 1. シナリオ型の公園づくり**
 ・多くの市民の方々と一緒に話し合いながら、公園の将来像や利用ルールを決定
 ・一度決まったルールは時代や市民のニーズ変化に即して柔軟に対応し、改善
- 2. 景観を重視した公園づくり**
 ・樹木・樹林や水辺、朝日浴場など、自然景観の魅力を活かした公園づくり
 ・この公園に訪れた人たちが様々な風景との出会い、発見しめる公園づくり
- 3. 環境に配慮した公園づくり**
 ・水辺や樹林地、畜産や生物多様性自然環境の保全
 ・公園づくりの過程で発生する樹木材・廃材等をリユース
 ・子ども向けの遊具や自然観察の施設
- 4. 地域の活性化等に役立つ公園づくり**
 ・学校・地場産品・企業・各種団体など、連携した様々な活動プログラムを展開
 ・地域緑化、種まきコンクール(形成等に活躍する人の育成)
 ・観光客のワンストップ拠点形成など



人と自然をつなぐ(パーククラブ)活動①

◆各種調査活動

- ・行政は、調査に必要な備品の購入、データ蓄積
- ・パーククラブのスキルアップのための講師派遣
- ・パーククラブは、公園内の動植物調査などを実施

⇒よりきめ細かなデータ蓄積
⇒パーククラブによる来園者向け「公園案内」の実施
⇒来園者へのサービス還元

人と自然をつなぐ(パーククラブ)活動②

◆散策路・水路づくり

- ・大阪府は、主要な幹線道路整備及び粗造成を実施
- ・散策路は、間伐材などを利用し、パーククラブや大輪会の協働で整備
- ・広場や散策路の名称もパーククラブ自ら提案し決定する

⇒パーククラブ主催の「自然観察会」の実施
⇒施設に対する愛着向上
⇒きめ細かな維持管理
⇒来園者へのサービス向上

人と自然をつなぐ(パーククラブ)活動③

◆五感を使ったプログラムの実施

- ・自然観察、工作体験、竹切り体験、竹馬遊び等
- ・「イオン日根野店チアスクラブ」と協働

⇒地域の活性化
⇒来園者へのサービス向上

パーククラブの課題と今後

◎パーククラブ立ち上げから5年経過し、養成講座を継続的に開催した結果、メンバーは100人規模に

(課題)

- ・メンバーの高齢化により若手が少なく、男女比が修正されない。
- ・活動範囲の広がりやメンバーの増加などにより、事務局作業が増えている。

(今後)

- ・養成講座の内容検討
- ・パーククラブの体制を検討
- ・スキルアップ講座の開催

⇒体験プログラムの多様化、来園者サービスの向上

おわりに

平成27年度
緑の都市賞・緑の環境デザイン賞 合同表彰式

「緑の都市賞」内閣総理大臣賞を受賞!

■ 公園へのアクセス

【公共交通機関で移動した場合】
 ・JR長瀬駅から徒歩30分
 ・いずみエコーエクスプレス「泉佐野丘陵緑地パークセンター」バス停から徒歩0分

【お車で移動した場合】
 ・阪和線上之郷インターまで

■ お問い合わせ先
 泉佐野丘陵緑地 パークセンター
 〒596-0024 泉佐野市上之郷90番地
 TEL : 072-467-2491 (平日9:30～17:00)
 FAX : 072-467-2491
<http://izumisano-hyuryo.jp>

「活動紹介と市民連携」

NPO法人 やましろ里山の会（京都府京田辺市）

深田 三郎



1. 本会の紹介

私たちは、自然を大切に作る仲間の輪を大きくすることをスローガンとして行動しています。楽しい活動には、楽しくする活動、楽しくなる活動、楽しくさせる活動という三つの条件があり、それらを基本理念として事業を進めています。

やましろ里山の会がある京都府京田辺市は、奈良県、大阪府と隣接しています。とんちで知られる一休寺や同志社大学のキャンパスがあり、木津川が流れています。活動内容としては、昆虫、植物、魚、鳥などの自然観察をはじめ、講演会やいろいろな展示発表をイベントのときに行ったり、学校での学習支援なども行っています。

広報については、会誌を年2回発行しています。180～200ページの内容で、会員の他、一般の方にも知っていただくために公表させていただいています。学校の先生や一般の方々からいろいろなご意見や感想を頂き、皆で共有しながら勉強しています。「週刊ニュース」も毎週水曜日に発行して、これから行おうとする活動の問題点についてみんなで議論しながら進めたことや、その結果などを報告しています。

成果物としては、『木津川の草花』や『京都木津川の草花たち』という本を出しました。それから、京都全体にどんな植物がどれだけあるかをまとめた『京都府植物誌ノート』も作りました。さらに、『木津川読本「木津川はどんな川？」』は、木津川沿いにある各小学校に50冊を配り、各校で利用されています。子どもたちが自然のことを学べる他、歴史についても書いてあります。他にも、木津川から魚がだんだん減っていて、外来種が増えているので、昔ながらの河川護岸工法である竹蛇籠の製作と設置を行っています。このような取組みを通じて、皆さんに自然のことを知っていただいています。

2. 活動概要

主な活動は木津川での植物観察で、木津川に生育する絶滅危惧種のレンリソウを保存・管理しています。昆虫観察会では、国蝶であるオオムラサキなどを観察しています。近畿大学を昨年お辞めになった桜谷保之先生が、当会の顧問としていろいろと教えてくださっています。

魚捕りは夏に4回行って、1回に100人の親子が木津川で魚を捕まえたり、水質を調査したりしながら、木津川のことを学んでいます。また、投網を打つなどの魚とり体験もしています。

木津川では、野鳥観察も行います。シロチドリは木津川にしかいない鳥なのですが、チドリ産卵場所は川の砂の大きさによって変わってきます。参加した子どもたちは、観察会の皆さんと一緒に実態調査をします。

また、環境や自然などをテーマに取り上げた「自然と環境講演会」を春と秋の年2回開いて、皆で知恵や認識を深め、世の中の流れを知ろうとしています。学校や教育委員会からの要請で、学校での稲刈り体験などの課外授業も行っています。

『木津川花ごよみ』も出しています。木津川は堤防が砂でできているので、堤防を支える草花は

本当に小さな花ばかりです。24km にわたる木津川には、京都府内にある 3800 種の植物のうち、917 種類が生育しています。その中に、レンリソウのような絶滅危惧種があります。

木津川の植物標本を何年もかけて作って、『木津川生育植物標本写真集』を出しました。価格は 5 万円、800 ページです。植物標本 2300 枚から 700 枚を載せています。

10 月 17～18 日、木津川の両岸に湾処（わんど）や魚の棲みかつくりのために、竹蛇籠を設置しました。京都大学の先生に指導していただいて、うまく作ることができました。夏にはホタルの集いと里山音楽会を開きます。

また、子どもたちに田植えを体験してもらって、食のいろいろなことを勉強してもらっています。現在、日本は食料自給率が低いので、体験してもらうことで将来の農業について考えてもらうきっかけになればと考えています。七草粥の日の前日の 1 月 6 日には、七草を摘み七草がゆを食べ、昔の人の風習を学んでもらいました。4 月には、当園の休耕田で春の野草を食する会を開きました。4 月 4 日には、摂南大学にボートを借りて、こぎ方を教わりながら、地元の協力で農業水路を止めて、親子の花見を兼ねた舟遊びもしました。

体験活動としては他にも、木津川で魚捕りや水質調査を子どもたちと一緒にしています。さらに、木津川は数少ない草原でもあるので、チョウ取りなどもして楽しんでいます。

里山農園活動としては、放棄田だった場所で農園づくりを行って、夏野菜や冬野菜を栽培しています。山林の保全を図るために原木から切り出す炭焼きも行っています。

一般の方には広報や新聞などで知らせており、年間イベント数は 100 回、年間参加者数は 7000 人に上っています。御清聴ありがとうございました。

● 発表資料

第4回緑の交流広場

人と自然をつなぐ活動

2011年3月11日
NPO法人 やましろ里山の会
理事 栗田三郎

自然を大切に作る仲間の輪を大きくする

楽しい活動 楽しくする活動 楽しくなる活動 楽しくさせる活動
本日の発表 ここまでできた 到達点 目標ではない

講演会 指導 学者や知識者 専門家から教えていただいた

この指針を頂いた...ほとんど無料で
聞いて終わるのではダメ

実践して行動して、何か形にする。それが 樹木だとしてきた

やましろ里山の会の紹介

所在 京都市 京田辺市 一休寺 同志社大学 木津川
関西学院文化学園都市

目的 自然を大切に作る仲間の輪を大きくする

活動 自然観察 昆虫 植物 鳥 魚
講演会 展示発表 学校の学習支援
広報 会誌(40号の発行(準備中)(180頁) 年間2回発行
週刊ニュース(60号の発行(毎週発行))
成果物 木津川の草花、京都(木津川)の草花たち
木津川生育植物標本写真集
京都府植物誌ノート
木津川版本「木津川はどんな川?」
竹蛎鮎の製作と設置

活動紹介

植物観察会

活動紹介

昆虫観察会

活動紹介

鳥取県 2015年夏 20回開催 スタッフ30人 定員ないので参加者に呼びかけ

活動紹介

野鳥観察

活動紹介

野鳥観察

活動紹介

環境と自然講演会(春)20回目を計画

里山講演会(秋)

地球温暖化 二酸化炭素排出3月5日 里山の会員が知識を深めあう場

活動紹介

総合学習支援 精華町精北小学校 基内小学校

活動紹介

総合学習への支援

活動紹介

会誌「里山の自然」発行

週刊ニュース60号

活動紹介

木津川の花ごよみ

木津川は砂でできた堤防で毎年草刈がされ、春には一気に太陽光を浴びて成長がスタートします。栄養豊富な植物は少ないので、小さな弱い植物も生育できる仕組みとなっています。

活動紹介

木津川の草花たち

写真500枚 左右両岸の埋め
木津川(24km) 917種の植物の生育を確認
京都府では3800種の植物が生育記録
原生原生林 1000種

月毎に写真を編集
散歩のハンドブックに利用

3年間 毎月 宅も夏も歩き続けた

活動紹介

木津川生育植物標本写真集

5万円 800頁 オールカラー

みんなで採取
標本に 2300枚
同定
標本保存
写真撮影
編集
発行

活動紹介

木津川橋本
「木津川はどんな川?」
木津川流域 山城地域
全小学校 220校
50冊づつ寄贈

目的
木津川について
正しい理解した大人に

活動紹介

活動紹介

京都府植物誌目録ノート

3819種の生育記録誌



御清聴ありがとうございました

自然を大切にすると時間の輪を大きくする

年間参加者数 7000人
年間イベント 100回
ほとんど一般募集 一般新聞でも広報

「ひとと自然をつなぐ環境教育の推進」

bioa（大阪府茨木市）

瀬口 和矩



1. 茨木市の状況と環境

bioa の bio は生きもの、a はアートという意味です。茨木市は自然が半分、まちが半分の地域で、北部の安威川の上流には溪流や里山があります。オオタカが営巣していたり、オオサンショウウオが住んでいたりと、豊かな自然環境に恵まれています。

茨木市では今、まちの方がどんどん変わろうとしています。立命館大学が JR 茨木駅近くにできて、何と 6,000 人の学生が一気に増えました。それから、国際文化公園都市（彩都）ができ、新名神高速道路の茨木北インターチェンジ、安威川ダムという大きなダムができます。西日本最大のショッピングモールの建設計画もあるようです。

まちの人たちは、北部の自然や歴史・文化のことをあまり知りません。北部の人たちは、まちの人たちにもっと来てほしい、もっと知ってほしいと思っています。子どもたちも、まちの学校区には自然がない場所が多く、山の学校の周りには豊かな自然環境がありますが、触れることができない自然が多くなっています。そういう中で、環境教育を通して人と自然をつなげ、地域を知ればまちづくりにつながるという観点で、この事業を行っています。

2. 環境教育の推進に向けて

bioa は、環境教育の推進、協働の取組み、地域活性化という三つの大きなキーワードを掲げて活動を進めています。私は茨木に 40 年住んでいるのですが、最初はほとんど人脈がありませんでした。熱い思いしかなかったので、その熱い思いを持っているいろいろなことにチャレンジしている状況です。

縁あって、全校児童 15 人の清溪小学校と麓の安威小学校の 2 校で、年間を通した環境教育を進めています。授業をしながら、いろいろな団体や行政、学生たちとうまくつなぐことができ、環境教育の推進がまちづくりや観光につながるための基盤づくりができるのかなと思っています。

そういう状況で、「茨木市の環境教育を考える会（仮称）」の設立準備に入っています。いろいろな方々にヒアリングする中で、「各学校の取組みが十分把握されておらず、どんな環境教育をしているのかという共通理解が十分でない」という意見や、学校の先生からは「準備や体験型授業の安全面を懸念する」という声がありました。それから、「英語や人権・平和学習など、いろいろな授業をこなさなければならないので、環境教育をやる時間がない」。それから、「市民団体の方たちは自分のペースでやりたいことだけやる人が多い」という声は仕方がないと思います。「平日日中の対応がなかなか難しい」「教えるスキルにばらつきがある」という声も聞こえてきました。

そこで、環境教育の基盤を支える場とカリキュラムづくりや授業をおこなって環境教育を進める場の二つのプラットフォームの形成を目指して、検討会や連絡会を重ねました。

3. 小学校での取組み

そして、清溪小学校での取組みが始まりました。生きものをつなぐの紙芝居からスタートして、安威川ダムを見学した他、花博の生態園の助成金を頂いたのでビオトープづくりを目的に、子ども

たちがワークショップをしながら計画を立てました。現在作業中で、今月中には完成します。来年度はビオトープを活用した環境教育を行います。

安威小学校では、年間を通して水環境の授業を行いました。最初に環境全体の仕組みなどを学び、それからゲームを通して水の循環を学びました。夏休みには水に関する宿題を出し、水はどこにあるのかとか、人と水との関わりなどについて資料を渡し、子どもたちが壁新聞を作りました。秋には、「水辺の楽校」で、実際に安威川に入り、生きものを観察しました。それから、オオサンショウウオがいる安威川上流も見学しました。

2校の交流も行いました。清溪小学校の児童15人は一生懸命、自分たちの学校の特徴を発表してくれて、なかなかの感動でした。安威小学校は市の発表会で水環境について学んだことを発表しました。

4. 今後の展望

来年度以降は、これらの取組みをベースにして、1～6年までの各学年のカリキュラムを作ります。安威小学校の今年度の取組みは4年生でしたが、それをブラッシュアップしながら、さらに深めていきます。そして、年間を通したカリキュラムを各学年で実施していくことを目指しています。

幸いなことに、地域の方との出会いがありました。その地域の方と地元の追手門大学のミツバチの取組みを教材化し、授業を実施していきます。それから、安威川ダム建設事務所や茨木土木事務所、水生生物センターの方たちと一緒に、安威川の環境を教える仕組みをつくり、学生団体が実働部隊として活動できる協働の仕組みができればいいと考えています。それから、清溪の方で活動している団体ともつながることができて、里山を子どもたちにも知ってもらう活動を、来年度も続けていきます。

環境教育は人づくりです。身近な自然と関わり、日本を大切にする人を育てることを目指し、環境教育の推進がまちづくりや観光にもつながるために、この活動を続けていきたいと考えています。

● 発表資料



まちが変わります

北部は
国際文化公園都市(彩都)、安威川ダム、
新名神茨木北インターチェンジ、巨大物流施設
が供用中及び建設中。

南部は
立命館大学茨木キャンパスが開設
西日本最大のショッピングモール計画

**まちの人々は
北部の自然や歴史・文化
のことをあまり知らない**

**北部の人たちはまちの人たちに
知ってほしいし、来てほしい**

子どもたちも

まちの学校区には
自然がない場所が多い

山の学校の周りには
豊かな自然はあるが、
触れることができる
自然が少ない

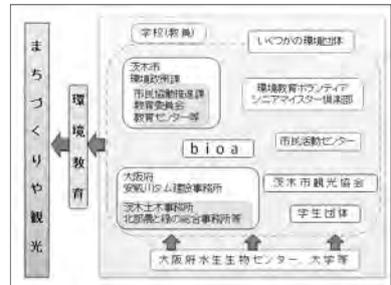
**環境教育を通して、
ひとと自然を
繋げよう**

↓

**地域を知れば、
まちづくりにつながる!**



**熱い想いで
人探し!**



↓

**茨木市の
環境教育を考える会
(仮称)**



**各学校の取組みが充分
把握がされていない**

準備や体験型授業の安全面を懸念

英語・人権・平和学習などやるべき
事が多く、環境教育の実施が難しい

自分のペースで、
できることだけやりたい

平日の日中の対応は難しい

教えるスキルにバラツキがある

**環境教育の基盤を
支える場**

・あり方の検討、交流...

環境教育を進める場

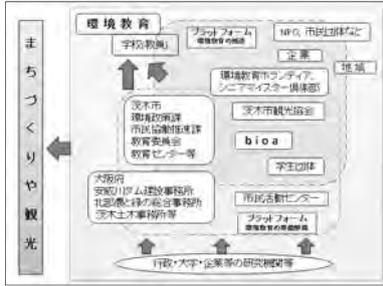
・カリキュラムづくりや実践...





来年度以降は今年度の取り組みの継続と新たな取り組み

- 地域課題の取材先 安威川で遊魚の観察
- 地域資源の取材先 安威川で遊魚の観察
- 安威地区のミツバチの専門家
- NPO素材探検隊
- 進手門大学 ミツバチプロジェクト
- 安威自然の会
- 高尾山自然の会
- NPO堂水ハラとカシの会
- 大塚町安威川 ダム建設事務所 草木生本事務所
- 水生生物センター
- 学生団体支援
- 大塚町立シラカシ 教育センター 高尾山自然の会



事例発表⑨

「人と自然、人と人をつなぐ

コミュニティガーデン」

庭暮らし研究所（奈良県奈良市）

畑 明宏



1. 独立の経緯

私自身はガーデニング研究家であり、樹木医です。1991年から23年間は積水ハウス(株)本社設計部に勤めていました。23年間、大きな組織でまちづくりやコミュニティづくりなどをやってきたノウハウを活かし、2014年に独立しました。現在は人と自然、人と人がつながることを大切にする「庭暮らし研究所」の代表として、心が豊かになる「暮らし園芸」を世の中に広めています。

2. 代表作「新・里山」

私の代表作は、積水ハウス本社がある梅田スカイビルの足元に作った「新・里山」です。2400坪の広さに田んぼと畑と雑木林を展開した空間です。10年前にできたのですが、私が会社に企画書を出して、設計・施工しました。梅田スカイビルのような大きい建築物を建てる時には、ある大きさの公開空地を作るよう定められています。

公開空地の中には、単に開発要件を満たすだけの緑地部分もあるのですが、私はそれでは駄目だと会社に強く訴えかけ、8000万円を掛け、人が憩える空間を作りました。幸い会社や社会からも評価を受けています。この公開空地は、「緑の都市賞」内閣総理大臣賞をはじめ、企業フィランソロピー大賞などいろいろな賞を受賞しています。

私はこの緑地を作るに当たって、人と自然、人と人がつながる仕組みをつくりました。そして、その仕組みが継続しながら発展する流れも作り出しました。私は設計者・企画者であったのですが、管理の部分まで踏み込みました。具体的には月に1回の定例会を、ビルのオーナー側の担当者や管理会社とその協力の造園業者、実際に植物の管理や樹木の剪定をするスタッフも含めて、10年間ずっと打合せ会議を続けています。私が退職した後も、その打合せ会議はずっと継続しています。

立場の違う人たちがフェイス・トゥー・フェイスで話をするのが、ネット社会の便利な時代だからこそ重要だと考えています。結果的にこの緑地帯にハイタカが来たり、絶滅危惧種のミゾゴイが来るような現象も起こりました。自然界がその場所を認めなければ動植物は絶対に反応しませんから、自然界からそういう評価を頂いたことは本物の認定を受けたようなものです。人間は良い空間や仕組みは残そうとします。各担当者は異動等で変わることもありますが、担当者が変わっても良いものは継続するものです。この緑地は現在も進化し続けています。新・里山は24時間どなたでも自由に見学することが可能です。

また、若いころの代表作の一つとして、西宮マリナパークシティのまちづくりがあります。西宮市の海沿いにある32haのまちです。ここの自慢は、分譲マンションの管理費にフラワーサークル代という花を植える活動の予算をあらかじめ取って、それを承認した人だけがマンションを買う形態になっているということです。私が関わったのは1500世帯ですが、そういった仕組みをつくって継続していただいているのはうれしいことです。

3. 私の暮らしぶり

私は奈良市で自給自足をしています。米を育てて、収穫して、子どもたちが田んぼで遊んだり、人力で脱穀したりして、最終的には命を頂いています。現代は機械を使う便利な時代です。機械やテクノロジーを使うのもいいのですが、機械に頼り過ぎると人と人とのコミュニケーションがなくなってしまう。その辺はよく考えないと、便利さにかまけて物に流されてしまいます。だからこそ、あえてわが家は食料を人力で作ることにこだわっています。私が仕事で行うプログラムでも、手で脱穀したり、稲刈りをしたりしています。

また、作物に向き合う姿勢としては、自分が命を育ててやろう、自然を征服してやろうという気持ちではなく、自分も自然と寄り添う気持ちになることが大切だと考えています。育てるよりも、育つ環境づくりをすることが大切だと思うのです。

4. その他の活動紹介

この春で6年目になるのですが、NHKの「ぐるっと関西おひるまえ」という番組で、1坪で野菜やハーブ、花の栽培が楽しめることを紹介するコーナーに毎月出演しています。ガーデニングのセミナーを開いたり、住宅団地でコミュニティガーデン作りをするのも私の仕事です。

それから、震災の関係で宮古市からも仕事があって、コミュニティガーデンを作っています。心のケアがなかなか追いついていないので、心に共通の庭をつくるという思いで、メンバーとゆっくり楽しみながらやっています。

また、福祉施設でも庭づくりをしていて、ハンディキャップを持っている方たちとも一緒に作業します。自然というのは、境界がありません。サツマイモを掘ったり、苗を植えたりするときには皆感動します。服部緑地ではキッズガーデンづくりをしています。私のようなプロが主体になるのではなく、子どもたちが主体になって、楽しみながら庭づくりをしています。

(Q1) 枯れてしまった花をどこかでまた咲かせてやりたいと思ったりするのですが、小さな庭を有効に生かす方法をアドバイスしていただけたらと思います。

(畑) 品種にもよるのですが、種を採ることが命をつなげることになるので、掘り上げて、小さな植木鉢に取れば、植物は過酷な環境でも種を付けようとします。生き物にとって、それが最終目的だからです。種を掘り上げて別に植えて、メーンの場所では季節の花を植えるなどしてつなぐ方法があります。

(Q2) 畑さんの3人のお子さんは、一緒にお米を作ったりされているようですが、一般家庭のお子さんとは比べて特徴があれば教えてください。こういう素晴らしい環境の中で、どんなお子さんに育つのか非常に興味があります。

(畑) 我が家の教育方針として、自宅にはテレビやゲームや車がありません。子どもに対する最大のプレゼントは「退屈を与えること」と考えています。人は退屈から抜け出すため必死にもがくものです。大人も子どももそうですが、退屈が一番苦痛です。しかし、不思議と自然界に身を置いていると、土の匂い風の音、虫や野鳥の動き、植物の変化など、人それぞれに興味のある現象が現れるものです。子ども達には大自然という環境を与え、その中で何かを感じてくれればと思っています。

● 発表資料

人と自然
人と人をつなぐ
コミュニティガーデン

庭暮らし研究所
はたあきひろ

はたあきひろ
ガーデニング
研究家
樹木医
48歳



1967年生 西宮市出身
1991年～ 積水ハウス

2014年～ 庭暮らし研究所

おうちねぎ
で
人と人がつながる



いのち(人)
と
いのち(植物)
の対話





育てるより
育つ環境づくり



こんな活動を
しています！
はたあきひろ



講 評

川口 将武

4件とも素晴らしい発表で、とても興味深く伺いました。まず、最初の泉佐野丘陵緑地パーククラブの活動は非常に先駆的で、きちんと四つの理念に基づきながら、体制づくり、場づくり、自然環境への配慮に取り組んでおられると思いました。特に印象に残ったのは、「つくり続ける公園」だということです。それが全てを表現していると思いました。これまで公園は、とにかく早く整備して、使ってもらおうという作り方をしていたと思うのですが、泉佐野丘陵緑地の話を聞いていると、ゆっくりつくることの大切さ、ないものを自分でつくっていく楽しみといった部分が逆に新しいと感じました。

次に、やましろ里山の会の発表で驚いたのが、800ページのオールカラー5万円の標本です。地域にいろいろな自然があるということ丁寧調査していった証だと強く感じました。そういう地域の宝があり、綿密な調査があるからこそ、いろいろなプログラムに発展しているということ学びました。

三つ目のbioaの発表では、茨木は自然環境が非常に多様で、まちの中でいろいろなことが起こっているながら、山の方でも起こりつつあるということに驚きました。初めは人脈がなくて困って、熱い思いで人探しをしたところから始まったこと。その後、非常に多様なつながりができ、環境教育を考える会が出来上がっていったというあたりが、どこにうまく進んだ理由があったのか伺いたいと思いました。今から活動をはじめようとしている人たちにとって、地域にどう入っていくのかという部分は簡単なようで実は難しい問題です。特に学校に入っていくと、子どもの安全の話になったりして難しくなる場合も多いと思います。そういう入り方のところについて、今後そういう活動をしようとする人たちにサジェスションできるのは、非常に重要なことではないかと思いました。

最後に、庭暮らし研究所の発表では、子どもの育て方が違うのに驚いてしまいました。退屈を与えるというのは、私自身にとってすごくすとんと落ちました。やはり自然環境との係わりや人間関係の中からの「発見力」なのでしょう。学生と付き合っていて、言葉でのコミュニケーションの背景にあるものを読み取る力は結構大事だと思うのですが、その辺がちょっと足りないと感じることがあります。また、環境活動をやっていると、目の前に見えていることよりも、その背景にあることや、今見えている美しいものがなぜ成立しているのかということを知ることができる力が、非常に大切になるのではないかと思います。ですから、そのような環境で大きくなられたお子さんは、場の空気や人の感情を読めるような子になっていくだろうと思いますし、ここで発表されるような環境活動を実践する素敵な方になられるのではないかと、聞いていて思いました。

ご発表いただいたり団体の皆さま、どうもありがとうございました。私は去年、聴衆として聞いていたのですが、今日は質疑もたくさん出ていて、活発な意見交流ができたと思います。今年の発表が非常に魅力的だったのだらうと感じました。先ほども展示を見せていただいたのですが、立体的に飛び出るような展示があったり、落ち葉釣りができたり、現物の反物を飾っていただいていたたり、パンフレットなどで活動内容がPRされていたりと非常にバラエティに富んでいて、今までの活動の積み重ねを感じる素晴らしい展示だと思いました。

全体を聞いていて一番思ったのが、今回のテーマである「つながること」の原点は、まず自分が楽しみ、自分の仲間も楽しみ、自分たちが何でつながっているのかを確認しながら活動していくことなのだろうと思いました。そして、自分たちが楽しいだけでなく、誰かの、どこかのためになっていること。皆さんが共通して言っておられたのは、地域への恩返しでした。自分たちが活動のフィールドにしている里山や田んぼや地域などに貢献するということです。奉仕という言葉をおっしゃられた方もいたのですが、お返しするということですね。その実行のために、産官学民のいろいろな主体と連携しながら、ネットワークをつくって活動を展開しているところは全体に共通していると思いました。

花博協会の理念は「共生」ですが、まさに利己的な利益ではなく、相手も利益が得られるような「共生」を皆さん展開されていると思いました。また、そこに気付ける機会こそがこの場であると感じました。

本日のテーマである「つながり」を活動として続けられるのは、やはり理念を持っているからだと思います。皆さん必ずきっかけとなる課題から理念と目標をたて、組織をつくり、仕組みをつくり、プログラムをつくりながら、計画的に活動されています。やはり目標がないと、何のために頑張っているのかを確かめられなくなってしまうことがあるので、折に触れて目標を確認する、ふりかえるような機会を大切にすることが環境活動を続けていく上で重要だと思いました。そういう意味では、泉佐野丘陵緑地の「つくり続ける公園」の中での順応的管理・運営という取り組みは、非常に興味深い事例だと思いました。

私は、大学の地元で竹林の保全活動として企業や市民と連携し、竹筒を使って納豆を作る取り組みなどいろいろなことをしているのですが、活動が続いていくとだんだんマンネリ化していきます。私は10年ほど続けている活動に三つほど関わっているのですが、活動は大体3年おきぐらいで進展していくということを、経験として何となく感じています。初めは一生懸命で頑張っているうちに時間が過ぎますが、3年ぐらい経つとようやく活動や組織のかたちが見える一方で課題も見えてきます。そこからさらに推進していくためには、発展プロセスの中で、「理念や目標」をしっかり持つこと、そしてそれを継承していくことが大切であると改めて確認することができました。

今日は、9団体による活動発表があったのですが、それぞれの活動地域を見てみると、大阪、兵庫、奈良、京都とほぼ関西で、ずっと続けて頑張っておられる方、あるいは新しいことをうまくやられている方がいて、関西の今の緑づくりの最先端の話を開けたと思います。皆さんも、今日のお話や刺激を地域にぜひ持ち帰っていただきまして、新しい活動を展開してもらえればと思います。雑ばくなどりまとめでしたが、今日は私自身も本当に勉強になりました。どうもありがとうございました。

パネル展示

第4回みどりの交流広場

農・都共生ネットこうべ
NPO法人 島本森のクラブ
NPO法人 ノート
河内木綿はたおり工房
梵菜農園
泉佐野丘陵緑地パーククラブ
NPO法人 やましろ里山の会
b i o a
庭暮らし研究所
大泉緑地ヒーリングガーデナークラブ
日下山を市民の森にする会
服部緑地都市緑化植物園友の会
蜻蛉池公園夢の森づくり隊
宝塚フラワー会
NPO法人 アルファグリーンネット
枚岡ネイチャークラブ
こうべ森の学校
花のボランティア 花いっぱいやさかい
NPO法人 おおさか緑と樹木の診断協会

《 パネル展示 》

①農・都共生ネットこうべ（兵庫県神戸市）

【農都の連携交流で生きものあふれる大都市神戸を！】

農・都共生ネットこうべは、1998年に開催された全国トンボ市民サミット神戸大会を大成功に導いた実行委員会を中心に結成されました。トンボを指標として生きものと共生する大都市神戸をめざすものです。生きものの発生源の田園地帯を保全するとともに、市街地に生きものの生息できるビオトープ的空間を拡大することで生きものあふれる大都市を可能としたい。



②NPO法人 島本森のクラブ（大阪府三島郡島本町）

【島本地区における里山保全活動の実態】

（財）大阪みどりのトラスト協会の里山保全1号地としてH10年2月活動開始。H14年2月任意団体「島本森のクラブ」設立、H23年10月NPO法人化。その後活動地を拡大し大阪府島本町内で現在5カ所35ha（天然林人工林竹林）。活動は定例2回/月、有志等H14年以降の参加実績平均600人/年（現会員40名）。主な活動内容①町有林5カ所に点在する町有上水道水源域の森林整備②大阪府下の「緑の少年団」や町域の青少年団体の環境教育支援③企業のCSR活動実践の支援・協働活動④ナラ枯れ木の処理と余材活用による天然林の保全⑤林縁部侵入竹除伐・竹林整備による居住区周辺の修景⑥これら林内整備時に発生する余材の有効活用（木竹炭化・茸櫓木化等）。

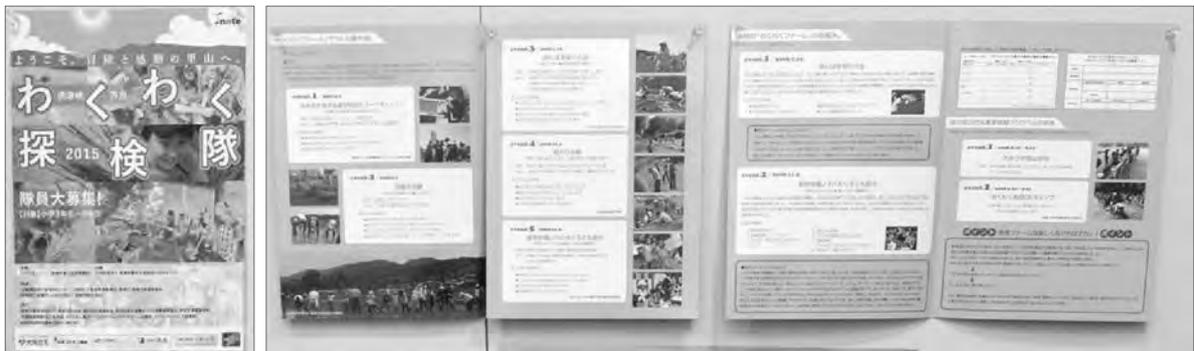


③NPO法人 ノート（大阪府高槻市）

【摂津峡・芥川わくわく探検隊

～人のつながり、食のつながり、伝えたい「ありがとう」の気持ち～】

高槻市の山岳地域内にある原地区において、子どもたちに日ごろ体験できない自然体験の場をつくり、自然の恵みや摂理について学ぶ「わくわく探検隊」プログラムを展開。活動を通じて、地域の豊かな自然や歴史文化、地域の人の営みやつながりの中で守られていることを子どもたちに伝えていきます。また、体験活動を通じ「高槻」のことを学び合い、他世代の人とかかわり合える場をつくることで、街のこと、子どもたちの未来をいっしょに考えていくことを目的としています。



④河内木綿はたおり工房（大阪府東大阪市）

【河内木綿の綿栽培から河内木綿反物まで】

かつて河内木綿は、江戸時代中期に大和川の付け替えによりできた新田が綿栽培に適していたため、河内の特産品として河内の産業を支え、全国的に知られるようになりました。しかし、明治に入り紡績機械の導入と外国綿の輸入により国産の河内木綿が衰退していきました。現在私たちは河内木綿の再生を試みる市民活動を始め、綿栽培をして、実綿から昔の道具の綿繰り機を使い種と綿に分けて、手紡ぎ糸にし、草木染や藍染にしたのち機織り機で織り上げ河内木綿の反物を織り河内木綿の再生に一步近づけたことを実感いたしております。



⑤ 梵菜農園（大阪府大阪市）

【農業はイベントだ！】

大阪市内での農業は可能かを実践しています。どこまでが経済的に可能か。農業とは栽培から販売までという概念ではなく、一つのイベント性が大切であるということ。ある意味ファッション性が大切である。

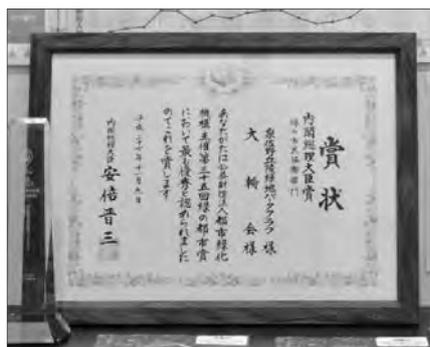
子供達が「あのおっちゃん達、おもしろいお百姓さんだな..」と思ってもらえる事... 農業仲間達との密接な関係を築く事。慣行農法、既成概念をまず疑う、実践、結果... が出来る頭の柔軟さ。誰もが見学、参加できる開かれた農園である事。あたりまえな「農」のあり方を模索しています。



⑥ 泉佐野丘陵緑地パーククラブ（大阪府泉佐野市）

【地域、企業、行政の協働による公園づくり】

公園の計画や整備に携わる府民ボランティア団体。オープン前から府と協働して公園づくりを行っています。公園のテーマや理念を共有し、公園づくりやイベント・プログラムの企画などを通して「人と公園をつなぐ」活動を進めています。公園を訪れるみなさまに、広く楽しんでいただける公園を目指して、メンバーが「公園でやりたいこと」「公園で必要と思われること」を考えながら企画・活動に取り組んでいます。地域、企業、行政の協働による公園づくりの先駆的事例として、第35回「緑の都市賞」で内閣総理大臣賞を受賞した団体です。



⑦NPO法人 やましろ里山の会（京都府京田辺市）

【活動紹介と市民連携】

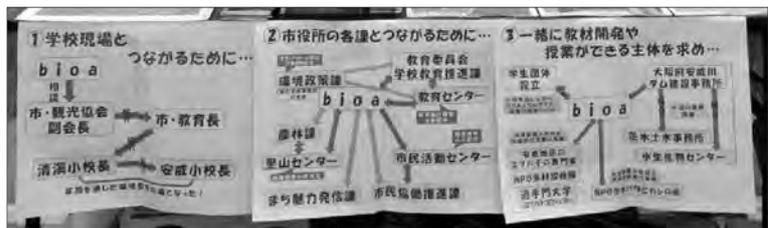
「自然を大切に作る仲間の輪を大きくする」のスローガンのもとに1996年に任意団体として発足、木津川や山城地域の里山の植物を中心に観察調査を行ってきた。里山農園を開拓し、希少植物や生き物の生育が観察できる環境を維持発展させるために頑張っている。



⑧ b i o a（大阪府茨木市）

【地域づくりにつながる自然を生かした環境教育】

環境問題の改善を図るため、環境教育などを通して、自然環境の保全と再生・創出を行い、その普及・啓発・研究を行う団体です。手段として、ビオトープを活用した環境教育、アートやレクリエーションを通じて、情報の提供と必要な支援を行います。それらにより、人と自然が共生できる地域社会づくりに寄与することを目的としています。



⑨庭暮らし研究所（奈良県奈良市）

【人と自然、人と人をつなぐコミュニティガーデン】

現在、私が取り組んでいる仕事の一つに、岩手県宮古市のコミュニティガーデン作りがあります。震災後、道路や復興住宅など公的施設は徐々に整っているが、海岸部分の戸建宅地は津波の危険性もあり、再建がなかなか進んでいません。また、心のケアも遅れています。コミュニティガーデンは、人と自然だけではなく、人と人の心をつなぐ空間にもなっています。



⑩大泉緑地ヒーリングガーデナークラブ（HGC）（大阪府堺市）

【大泉緑地の四季の自然を楽しむゲストと協力ボランティアの紹介】

高齢や障害のため、大泉緑地の四季の自然を1人で楽しむのが難しい方々の車椅子を押したり、安全に誘導する散策サポート活動を行っています。また、園内で趣味の楽器演奏練習をしている方々の協力を得て、特技を披露して頂き、演奏に合わせて懐かしい曲の合唱を楽しむ等のプログラムも組みます。桃山学院大学の学生さん達に車椅子実習や認知症講座を実施し、実技練習をした後に、ゲストの方々が園内で安全に過ごすサポート活動（FWの場）に参加されています。



⑪日下山を市民の森にする会（大阪府東大阪市）

【日下山を市民の森にする会活動紹介】

生駒西麓の麓に位置する日下山は標高 400m の起伏の険しい山です。天然林・人工林・竹林と 20ha の荒蕪とした山を地域の人々の交流、自然との共生の里山にする為、平成 14 年 9 月に市民団体として発足して 14 年。主に生駒山系花屏風支援事業や森林・山村多面的活動 3 ha に取組んだ結果、山には太陽の光も入り下草が育ち、昆虫や小鳥も戻り里山らしくなってきました。今後も遊歩道づくり、森林整備と保全に努め、楽しいイベントも行い、現在仲間を募集中です。



⑫服部緑地都市緑化植物園友の会（大阪府豊中市）

【活動風景とハーブクラフト】

私達の会は、暮らしに役立つ植物“ハーブ”の素晴らしさを多くの人たちに広くお伝えする活動を行っています。ハーブ園案内、ハーブ展、講習会などを通じて、ハーブの育て方や利用の方法を参加者に紹介し、体験していただいております。また、植物園で育てたハーブで展示用クラフトを作ったり、来園者へのハーブティーのサービスをしたり、採取したハーブの種を配布して“ハーブのある暮らし”のきっかけづくりになればと思っています。



⑬蜻蛉池公園夢の森づくり隊（大阪府岸和田市）

【府立公園内で里山保全活動 15 年】

府営蜻蛉池公園内の“ふれあいの森”を活動拠点として、里山の自然に親しんでもらう為の環境学習としてのイベントを“ファミリーメイト”と称し、2009 年より年 6 回実施、子ども達とその家族、そして次世代に里山を受け継ぐべき場の提供を行っています。



⑭宝塚フラワー会（兵庫県宝塚市）

【宝塚フラワー会の活動紹介】

フラワー会は、平成 21 年 9 月に開設した安倉フラワーガーデンを市と協働で運営管理する市民ボランティア団体です。ここの花苗は全て種から育成したもので、「目で見て勉強する施設」を目標にガーデン内のモデル花壇の整備をはじめ、市内の緑化団体や学校用務員を対象にした花苗づくりなどの学習会なども実施しています。またガーデン内で育成した花苗は小中学校の卒業式や入学式、さらに市の各種イベントの飾り付けにも活用され癒しの空間を提供しています。



⑮NPO法人 アルファグリーンネット（兵庫県淡路市）

【花と緑のまちづくり活動の紹介】

NPO法人アルファグリーンネット（略称AGN）は、兵庫県立淡路景観園芸学校の生涯学習コース「まちづくりガーデナー本科コース」の修了生を中心として、兵庫県各地域で花と緑のまちづくりを展開していくことを目的に結成されました。当会では情報交換、協力、支援等を行うことにより活動を活発化させたり、他の団体・機関との交流を図ることで技術・知識の研鑽やボランティア意識の高揚を図ったりすることを目的としています。



⑯枚岡ネイチャークラブ（大阪府東大阪市）

【大阪府域及び生駒山西麓枚岡地区周辺の動植物】

枚岡ネイチャークラブは、大阪平野東面のみどりの後衛として長大で奥深い山林の屏風をなす生駒山西麓やそれらの谷水を受けている恩智川流域の池島遊水地などを主なフィールドとして、そこに息づく樹木や草花、鳥、昆虫などの生き物たちをつぶさに見・匂い、やさしく触れ、耳を澄まして聞くことを通して「いのち」を感得することを目的とした観察会や工作教室、植生調査を実践しております。活動状況はホームページにて公開しています。



⑰こうべ森の学校（兵庫県神戸市）

【みどり育む六甲山を】

明治の頃、六甲山ははげ山でした。1902年本多静六の指導で水資源の確保と災害防止のため大規模な植林と砂防工事が行われた。その後、観光とレクリエーションの山として開発される一方で阪神大水害・第2次世界大戦・阪神大地震等々で山は荒廃した。2003年緑化100周年にあたり、市民参加による森づくりが始まった。市民ボランティアと神戸市と伊藤ハムによる協働の森づくりは13年目を迎えている。



⑱花のボランティア 花いっぱいやさかい（大阪府堺市）

【花と緑の美しい堺】

花のボランティア「花いっぱいやさかい」は、堺市にある市民主体の『花と緑のまちづくり』を進めているボランティアグループです。平成13年より大仙公園内の活動地においてスタートしました。今現在、会員は約600名。堺市内を7つのグループに分け、4ヶ所の活動地を中心に活動中です。主な活動は『花づくり・花かざり・花守（も）り』の3つ。さらに4つの部会（栽培部・広報部・企画部・圃場部）を設け、それぞれで充実した幅広い活動を行っています。



⑱NPO法人 おおさか緑と樹木の診断協会（大阪府大阪市）

【NPOおおさかの活動・・・樹木医の活動】

おおさか圏で活動する樹木医が集まって設立した団体です。樹木医の技術を活かし、天然記念物の樹木を始め神社仏閣などの地域の巨樹や古木について診断治療を行ない、守り残していく活動を行っています。また、街路樹や公園などの公共樹木を管理する技術者に対し、樹木の健全な生育に向けての管理技術の研修や指導を実施しています。その他、韓国や台湾などアジア圏での保護樹木に関する情報や技術の国際交流活動を行っています。



「第4回みどりの交流広場」

～里とまち、くらしと文化・風土、人と自然をつなぐ事例紹介～

開催概要

1. 趣 旨

地域での「緑化活動」、「農業」、「生業・伝統文化の保全」など自然と関わる様々な分野で活動している市民、企業、団体等の発表の場を設け、情報の共有や協働のネットワークを促進し、共生の輪を広げる。また、催しを通じて、花博理念である自然と人間との共生の普及・啓発につなげる。

2. 主 催 公益財団法人国際花と緑の博覧会記念協会

3. 後 援 大阪府、大阪市、兵庫県、神戸市、京都府、奈良県、奈良市

4. 日 時 平成28年2月11日（木・祝） 12:00～17:30

5. 場 所

第1部 花博記念ホール（鶴見緑地公園内）

第2部 旧生き生き地球館別館1F会議室（交流会）

6. 次 第

開会あいさつ 13:00～13:05

第1部 13:05～16:30

事例発表

- ・里とまちをつなぐ活動
- ・くらしと文化・風土をつなぐ活動
- ・人と自然をつなぐ活動
- ・全体講評

ポスターセッション

第2部 交流会 16:45～17:30

パネル展示 12:00～16:30

7. 参加者

約120名

第4回 みどりの交流広場

平成28年3月

発行 公益財団法人 国際花と緑の博覧会記念協会

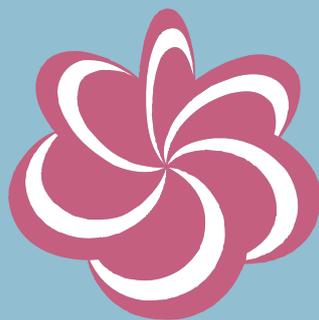
〒538-0036

大阪市鶴見区緑地公園2番136号

TEL 06-6915-4513

FAX 06-6915-4524

URL <http://www.expo-cosmos.or.jp>



EXPO'90
FOUNDATION